東京都小学校国語教育研究会研究主題

他者と協働し、豊かな言語生活を実現する国語学習

―身に付けたい力を意識し、自ら学びを進める―

書くこと部　研究主題

書くことのよさを実感できる単元づくりを目指して

第４学年国語科学習指導案

単元名　ドアの向こうの世界
～場面の様子が読み手に伝わる文章を書こう～

日　時：令和７年　２月２１日(金)５校時
児　童：大田区立洗足池小学校　第４学年２組２７名
担　任：大田区立洗足池小学校　教諭　村尾　陽太
授業者：墨田区立第一寺島小学校　主任教諭　園田　禎恵

１　単元の目標

○様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増やし、話や文章の中で使うとともに、言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにすることができる。
〔知識及び技能〕(1)オ

○情景や背景について書き表し方を工夫することができる。　〔思考力・判断力・表現力等〕B(1)ウ

○言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。　「学びに向かう力、人間性等」

２　単元の評価規準

	ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
単元の評価規準	①様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増やし、語彙を豊かにしている。（（１）オ）	①「書くこと」において、情景や背景について書き表し方を工夫している。（（１）ウ）	①粘り強く登場人物の気持ちの変化や性格、情景や背景について、場面の移り変わりと結び付けながら書き表し方を工夫し、学習の見通しをもって、相手に伝わるような物語を書こうとしている。

３　単元構想

(1) 児童について（児童観）

本学級の児童は、１学期の国語科「書くこと」の領域における「お礼の気持ちを伝えよう」の学習において相手や目的を意識して書くことを経験してきている。３学期には、「もしものときにそなえよう」の学習で、理由と具体例を挙げて自分の考えを書く活動を行ってきた。どの児童も書くことに対する意欲はあるが、すすんで書き進められる児童と、書き始めで手が止まってしまう児童との差が開いている実態がある。

以上の実態から、単元のゴールや相手意識を明確にして学習への意欲を高めるとともに、対話やグループ活動を取り入れながら語彙を増やしたり、表現のよさに気付いたりすることのできる言語活動を設定する必要がある。

(2) 学習材について（学習材観）

前項で述べた実態を受け、児童が豊かな語彙や文章表現を身に付けることができるようにすること、対話やグループ活動を通して言葉によるコミュニケーション力を高めることができるようにすることを目的とした学習材を検討した結果、「物語を書く」という言語活動を取り入れることにした。相手意識を隣のクラスの４年児童とする。クラスは違っても、一緒に遊んだり活動したりしている同学年の友達に読んでもらうという相手意識から、「〇〇さんはどんな内容の物語を書くと楽しんでくれるかな。」「場面の様子が〇〇さんに伝わるといいな。」等と、友達が自分の書いた物語を読むことを意識して書くことをねらいとした。児童が言葉による見方・考え方を自然に働かせながら、場面の様子が読み手に伝わる文章を書くことが期待される。

「物語を書く」という言語活動については、学習指導要領Ｂ書くことの言語活動例〔第３学年及び第４学年〕に「ウ詩や物語をつくるなど、感じたことや想像したことを書く活動」と例示されている。「作家の創作による物語は、主人公やその他の登場人物がそれぞれの役割をもっていたり、冒頭部に状況や登場人物が設定され、事件とその解決が繰り返され発端から結末へと至る展開によって構成されていたりするなどの工夫がなされている。」と示されている。以上により、「物語を書く」という言語活動を行うために、第３学年「たから島のぼうけん」（光村図書３年下）で学習した「始まり→出来事（事件が起こる）→出来事（事件）が解決する→むすび」という組み立てを基に、登場人物の気持ちの変化や性格、情景や背景について、書き表し方を工夫した文章を書くことができるようにする。さらに、物語の始まりと結びを「ドア」として統一する。あえて制限を加えることで物語の出来事を工夫することに焦点化できるだけでなく、出来上がった作品から「作った物語がこんなに広がるんだ」という児童の成就感を育てることもできるのではないかと考えた。

また、「物語を書く」という言語活動を行うにあたり、新たに単元を開発した。光村図書４年の教科書には「物語を書く」という単元が掲載されていない。そのため、単元を開発するにあたり、「山場のある物語を書こう」（東京書籍４年）、「「ショートショート」を書こう」（教育出版４年）、「たから島のぼうけん」（光村図書３年）の教科書を参考にした。

(3) 単元について（単元観）

本単元では、「隣のクラスの４年生に自分で考えた物語を読んでもらう」という単元のゴールを設定した。単元の始めにゴールを意識させることで、読んでもらう相手（隣のクラスの４年生）がどんな内容なら喜んでくれるのか、どのような言葉を使うと分かりやすいのか等と、児童が自ら思考を働かせながら物語を書く姿が期待できる。

第一次では、教師のモデル作品を提示して気付いたことを伝え合う。その際、２種類のモデル（良い例、悪い例）を示し、「どちらの物語が隣のクラスの友達に伝わるか」と問う。この問いにより、物語に必要な要素である、場面の設定（時・場所）、場面の様子、登場人物の性格・特徴・行動・気持ち・会話、「始まり→出来事（事件が起こる）→出来事（事件）が解決する→むすび」という構成に気付くことができるようにする。その後、単元の見通しをもつ。自分がどのような物語を書きたいか、または隣のクラスの４年生はどんな物語なら喜んでくれるのかという視点で、ファンタジー・変身物語・パロディーから物語の大まかな内容を選ぶ。（題材の設定）

第二次では、まず、物語の大まかな内容をもとに物語の設定を考える。構成は３年生での既習事項を生かして「始まり→出来事（事件が起こる）→出来事（事件）が解決する→むすび」とする。書くことに困り感をもった児童への支援として、物語の大まかな内容（ファンタジー・変身物語・パロデ

ィー）にそれぞれモデルを用意しておく。その後の記述・推敲の学習過程には３時間を予定し、児童が自ら学びを進められるようにする。途中で「レベルアップタイム」を設け、学習が進んでいる児童（アドバイザー）からヒントをもらったり、書き終えた児童同士で作品を読み合ったりする。この活動を通して、登場人物の気持ちの変化や性格、情景や背景について場面の移り変わりと結び付けながら書き表し方を工夫することができるようにする。

第三次では、共有として児童が作った物語を隣のクラスの４年生に読んでもらう。この言語活動を通して、「友達が喜んでくれた。」「自分の物語が〇〇さんに伝わった。」という成就感も育つことが期待される。

※参考資料「ことばの授業づくりハンドブック小学校「物語づくり」学習の指導―実践史をふまえて―」浜本純逸監修、三藤恭弘編（渓水社）

４　書くこと部で捉える「言葉による見方・考え方を働かせる」とは

書くこと部では、「書くこと」の学習における「言葉による見方・考え方を働かせること」を、単元における言語活動を通して、課題を解決する際に育む言葉への自覚であると捉えた。

その上で、書くことにおける「言葉による見方」とは、知識・技能的な側面から、書きたいことを表現するために、語彙や文・文章、段落、文章全体に着目することと定義した。また、「言葉による考え方」とは、情報の扱い方の面から、情報を整理する際の概念としての考え方（比較・類推・因果・分類／分解・抽象化・具体化・系統化・一般化）であると捉えた。さらに、思考・判断・表現的な側面から、書きたいことを見付けたり、書く対象を見つめ、表現したりすることとして、発想や着想を得ること、さらにそこから構想や連想を練ることであると定義した。

書く活動においては、この「言葉による見方」と「言葉による考え方」とを行き来しながら、単元の目標を達成することを目指している。この行き来には、①選択②運用③検討④想像の４つの場面が想定される。「選択」とは、どのような言葉を使うかを児童自身が吟味し、選ぶこと、「運用」とは、その言葉のもつ意味を確かめ、実際に使ってみること、「検討」とは、文脈において適切か考えたり、どのような意図でその言葉を使ったのかを推し図ったりすること、「想像」とは、その言葉を使ったときに読み手がどのような印象をもつかを考えること、である。

これらを複合的に体験することで、豊かな言語感覚を育成することが可能となると考える。豊かな言語感覚とは、言語で理解したり表現したりする際の正誤・適否・美醜・ニュアンスなどについての感覚のことである。

以上を踏まえ、獲得した言葉の力を単元内に留めることなく、教科横断的な視座で活用したり、自らの生活に活用したりする場をもったりすることで、豊かな言語生活を実現することにつながると考えた。

５　研究主題に迫るために

（１）児童が（本単元において）身に付けたい力を意識し、主体的に学習に取り組む。

本単元の重点目標は、「読み手に伝わるように、情景や背景について書き表し方を工夫する」ことである。場面の様子が読み手に伝わるように、粘り強く書き表し方を工夫する姿を期待する。

読み手に伝わる文章を書くためには、書き表し方を工夫することが大切だと自覚する必要がある。そして、情景や背景を表す語彙を増やすために資料を使って調べ、自分が想像している物語に合う言葉や表現を用いようとすることが「身に付けたい力を意識する」姿と考える。一つの言葉にこだわり、場面の様子がより詳しく伝わる表現はないかと考えることができるように、「情景を表す言葉のヒント集」や文例、国語辞典、図書資料等を置いていつでも確認できる「ヒントコーナー」を設ける。

「主体的に学習に取り組む」とは、相手に伝わるように、表現の工夫を粘り強く考えながら物語を書こうとしている姿である。始めの書き出し文「ドアを開けたら・・・」と結びの文「ドアを開けるとそこは自分の部屋だった。」を指定する。このように、あえて制限を設けることではじめの書き出しや書き終わりに困ることなく、どんな世界にしようかとわくわくしながら中の想像を広げることができると考えた。その思いが書きたい意欲を高め、粘り強く書く姿につながると考える。また、書き出しと結びが統一されていることで、書いた物語を友達と読み合う際に、内容の違いが明確になり同じ書き出しでも違う世界が広がることを知り、新たな考えをもつことができる。

また、「隣のクラスの４年生に読んでもらう」という相手意識をもたせることで「分かりやすく書き

たい」「伝わるように書きたい」という思いや、３年生のときよりもレベルアップした表現を使いたいという思いをもち、主体的に表現の工夫を考えようとする姿につなげたい。

（２）学習活動（言語活動）において、自らの考えをもち、多様な考えをもつ人と関わり、新たな考えをもつ。（確かにする、広げる、高める、深める、などを含む）

物語を書く中で、内容の展開や表現の工夫などについて悩んだ時に学習が進んでいる児童（アドバイザー）から、アドバイスをもらうことできるように「レベルアップタイム」を設定する。友達に相談することで解決策が見えてきたり、自分が困っていることを言語化することで思考が整理され、書き記す方向性が見えてきたりすることもある。一通り書き終えることができた児童も、チェック項目をもとに誤字脱字や表現の工夫などを友達同士で確認することができる「推敲コーナー」を設定する。

友達と読み合うことで、読み手に伝わる文章になっているかを確認できたり自分では気付かなかった表現の良さにも気付いたりすることができる。書くという活動において、一人で悩んで書く手が止まってしまうものという思いではなく、友達と関わることで書きたいことが広がったり、文章の内容や表現が高まったりするということに気付かせたい。それが、書くことのよさを実感するということにもつながると考える。

第二次の第３時から第５時までは、一人で書きながら、途中でアドバイザーに相談したり推敲コーナーへ行って確認したり、また一人で書くことに戻ったりするなど、それぞれの進度に合わせて自分で学習方法を選択できるように、柔軟な学習過程を保証し、書くことができるようにする。

（３）獲得した言葉の力を日常生活に活用し、言語生活を豊かにする。

現在の４年生は、低学年期がコロナ禍にあたっていた学年のため、対話やグループ活動など友達と直接的な交流を図ることが通常よりも少なかった児童である。その実態を踏まえ、本単元を通して友達と対話することでより伝えたい文章を書くことができたり、想像が広がったりする体験をし、言葉を介してやりとりすることの良さを実感させたい。

物語を書くことを通して、日常生活で絵本や本を読む時に言葉に着目したり展開の工夫を考えたりするなど、物語を読む視点が増えることにもつながると考える。日常生活の会話や文章を書く際に、言葉に立ち止まり、他の言い方や表現はないか探そうとする姿を目指していく。

また、同学年の友達と読み合うことを通して「書いて良かった」という思いをもち、日常生活での手紙や日記、他教科の振り返りなどでも自分の思いを言葉で表現して書こうとする意欲を醸成していきたい。

６　単元計画（全６時間）

過程（次）	時	学習活動	指導上の留意点	評価規準　評価方法
	０	・読書旬間や朝読書の時間に物語を読む。		
第一次 題材の設定 情報の収集	1	１教師の文例を読んで気付いたことを話し合う。 ２学習の見通しをもつ。 ３「ドアの向こうの世界」を想像して絵やメモに表す。 ４どのような物語を書くのか大まかな内容を決める。	○始まりは「ドアを開けたら…」、結びは「ドアを開けるとそこは自分の部屋だった」という構成を統一する。 ○物語のジャンル（ファンタジー・変身物語・パロディー）にそれぞれモデルを用意する。	〔主体的に学習に取り組む態度①〕 ワークシート・発言・観察 ・物語に必要な要素に気付いているかの確認。 ・どのような物語を書くのか決めようとしているかの確認

第二次 内容の検討 構成 記述 推敲	2	・「始まり→出来事（事件が起こる）→出来事（事件）が解決する→むすび」という物語の構成を考える。	○物語の設定と構成が分かるワークシートを用意する。	〔知識・技能①〕 ワークシート ・様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増やし、語彙を豊かにしているかの確認 〔思考・判断・表現①〕 ワークシート・観察・発言 ・登場人物の気持ちの変化や性格、情景や背景について場面の移り変わりと結び付けながら書き表し方を工夫しているかの確認
	3・4本時・5	1構成メモをもとに物語を書く。 2書き終えた作品を読み返し、隣のクラスの４年生に伝わるかどうか、文章をよりよく工夫する。	○「レベルアップタイム」において、友達同士でアドバイスをするように伝える。 ○情景をあらわす文の一覧「文のヒント集」を提示する。 ○書いている物語の大まかな内容が一目で分かるように、電子黒板に示す。 ○書き終えた児童は、「推敲コーナー」へ進み、自分で読み返した後、ペアで読み合い、文章を工夫するように助言する。 ○「推敲コーナー」には、誤字脱字や表現等、チェック項目を提示しておく。	
第三次 共有	6	・隣のクラスの４年生に読んでもらう。	○互いに読み合ったら、友達の作品の良かったところを伝えるように助言する。	〔主体的に学習に取り組む態度①〕 ワークシート・発言・観察 ・友達に伝わる物語を書こうとしていたかの確認
実の場		・出来上がった物語を一冊にまとめ、学校図書館に置き、校内の児童にも読んでもらう。		

7　本時の学習（4/6）

(1) 本時のねらい

情景や背景について場面の移り変わりと結び付けながら書き表し方を工夫することができる。

(2) 本時の展開

学　習　活　動	指導上の留意点	評価規準　評価方法
1　本時の学習の見通しをもつ。	○書き始めは統一した文章にすることを確認する。 ○前時までに書いたことを全体共有する。	〔思考・判断・表現①〕 ワークシート・観察・発言 ・情景や背景について場面の移り変わりと結び付けながら書き表し方を工夫しているかの確認
2　物語に使う表現の例を確認する。 3　構成メモをもとに物語を書く。必要に応じて、「レベルアップタイム」において、友達同士でアドバイスをする。また、アドバイスをもとにして自分の作品をさらに工夫して書く。	○文例や「文のヒント集」を参考にして、「ヒントコーナー」で国語辞典や類語辞典、参考となる物語や作品等を見たりしながら書くように助言する。 ○「レベルアップタイム」になったら、書き終えた児童がアドバイスをしたり、同じジャンル同士で話し合いながら書いたりしてもよいことを伝える。その場合、電子黒板の名札の色を変えるように伝える。 ○アドバイスがほしい児童は、電子黒板をもとに、「アドバイザー」に教えてもらう。 ○書き終えた児童は「推敲コーナー」に進み、チェック項目に沿って、自分の作品を読み返す。また、読み終えた児童同士で交流する。	〔言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿〕 ・構成メモをもとに、隣のクラスの４年生に物語の内容が伝わるかどうかを考えながら書いている。 ・「文のヒント集」や文例から自分が想像している物語に合う言葉や表現を用いようとしている。
4　本時の振り返りをする。	○本時を含め、記述と推敲で３時間を計画している。自分の進度を確認し、次回は、どのようなことをめあてにして書くのかを振り返るように助言する。	

８　板書計画

ドアの向こうの世界
～場面の様子が読み手に伝わる文章を書こう～

めあて　書き表し方を工夫して、構成メモをもとに物語を書こう。

物語の設定
（文例）

・言葉のたからばこ・国都辞典
・文のヒント集・類語辞典

資料　文例

令和太郎

ドアを開けたら…

（結）ドアを開けたら、そこは昔の田舎のおばあちゃんの家でした。わたしは、おじいさんになっていました。その家で、おばあさんと楽しく暮らしていました。

（発）ある日、おじいさんは山へしばかりに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。川で洗たくをしていると、大きなスイカが流れてきました。おばあさんは、おじいさんとニ人でスイカ割りをすることにしました。おばあさんが家に持ち帰り、おじいさんとおじいさんがさけびながら、棒を振り上げると、見事にスイカに命中しました。すると、スイカの中にはサムライが入っていたのです。

「イッテー」

と大きな叫び声が聞こえてきました。なんと、スイカの中にはサムライが入っていたのです。

「き、君はだれだい」

とおじいさんは聞きました。

「せっしゃの名は、スイカ太郎と申す」

と答えました。おばあさんは、おどろいて、

「何をしに来たの」

と聞きました。

「スイカの中に入り込んで、悪い鬼を退治しに来たのじゃ」

と答えました。

（発）スイカ太郎は、おじいさんとおばあさんにごちそうを用意してもらい、好物のスイカを腹いっぱい食べました。すると、

「さあ、これから悪い鬼を退治しに行くぞ」

と言って、山へ向かいました。スイカ太郎は刀を振り回して、

「あれよあれよと鬼をやっつけてしまいました。

（発）鬼を退治したスイカ太郎のおかげで、おじいさんとおばあさんは安心して暮らせるようになりました。三人は仲良くスイカを食べ、昼寝をしてしまいました。目が覚めるとそこは、ベッドの上でした。

「なんだ、ゆめだったのか」

とスイカ太郎はスイカの種がついていました。

令和花子

一つのドアを開けたら……

❸ドアを開けると、そこは広い森。空は青く、鳥たちが楽しそうに歌っていました。鳥たちの中には、見たことのある鳥も……。えりこのぬいぐるみとそっくりのシマエナガです。

❹「こんにちは。君がここに来るのをまって

「ここは、どこ？」

いたよ。

「ここはぼくの育った森だよ。さあ、ぼくの背中に乗って。」

えりこは、気づくとシマエナガの背中に乗っていました。

「さあ、出発。」

えりこはシマエナガの背中に乗って、大空を飛び回りました。

「雲の上を飛んでいるわ。」

大きな海や、広い草原。見渡す限り美しい世界です。他の鳥たちもいつの間にか一緒に空を飛んでいました。

一日中遊んだ後、えりことシマエナガはドアのところに戻りました。

「今日は本当に楽しかったよ。シマエナガ、ありがとう。」

えりこは言いました。

❺ドアを開けるとそこは、自分の部屋でした。

まくらのそばには、お気に入りのシマエナガのぬいぐるみ。えりこは、なぜだからわかりませんが、幸せな気持ちでいっぱいでした。

えんぴつに変身

令和れいこ

[37]ドアを開けたら…わたしはえんぴつに変身していました。名前はガンバルンバ。性格はその名の通り、がんばりやです。体の色はピンク。六角形の形をしています。頭ははりのようにとがっています。

[38]次の時間は、漢字のテスト。

「ようし、がんばるぞ」。

鉛筆のガンバルンバははりきっていました。

「わたしのパワーで漢字はカンペキ。だって、わたしは何でもできちゃうんだから」。

そう言って、気合いが入っていました。すると、

「ドッテーン」。

えんぴつのガンバルンバはつくえから落ちてしまったのです。ガンバルンバはつくえの下から

「たすけてー」。

でも、気づいてもらえませんでした。

ガンバルンバの声が聞こえたのでしょうか。

無事、ガンバルンバはえりちゃんのために漢字のテストで百点を取ることができました。

[39]ガンバルンバは

「ああ疲れた」。

と言うと、筆箱の中でねむりました。目が覚めると、そこは、ベッドの上でした。

「こっちだよ」。

ちゃんはガンバルンバを探しているのです。

と、声が聞こえてきました。そうです。えりちゃんはガンバルンバの持ち主。いつものお気に入りのえんぴつがない」。

[40]すると、

た。

ストのために、きれいに削ってくれていました。つも大切に使ってくれています。今日も、テ

かなあ」。

えりちゃんとは、ガンバルンバの持ち主。い

に。えりちゃんは、他のえんぴつを使うの

「ああ、今日の漢字テストは自信があったのん。

学習計画表

	題材の設定	構成	記述・推敲	共有
日				
学習活動	学習の見通しをもつ。	物語の構成を考える。	・物語を書く。 ・出来上がった作品を読み返し、文章や言葉を工夫し、字のまちがいなどがないか確かめる。	となりのクラスの４年生に読んでもらう。
チェック内容	モデル文を読んだ。 学習の見通しをもった。 どんな物語かを決める。	物語の設定を考えた。 出来事を考えた。 出来事の解決を考えた。	物語の構成通りに作品を書いた。 場面の様子や登場人物の性格が分かるように書いた。 友達の作品の書き方や内容のよい所を見つけた。 物語の構成通りに作品を書いた。 場面の様子や登場人物の性格が分かるように書いた。 友達の作品の書き方や内容のよい所を見つけた。 物語の構成通りに作品を書いた。	三年生に物語の内容が伝わった。 学習の最初に立てためあてを達成できた。
ふり返り				

【ふり返り、チェックシート】　　名前（　　）

この学習でできるようになりたいこと、がんばりたいこと